

---

---

## ホットニュース(平成13年度／第48号)

---

---

### ●今月の業界ホットニュース／都市再生への道

1月発刊のホットニュースに、経済の宇沢弘文氏の話を取りあげた。その後日談ではないが、氏は現在日本経済新聞の3月版に「私の履歴書」を連載中である。

その書き出しで(3月1日付)、本来人間の幸せに貢献するはずの経済学が、その役割を果たしておらず、人間を考えるとどこから始めなおしていると言っている。そして人間回復を目指して「都市再生」に取り組んでいるヨーロッパの諸都市を見て歩いているところらしい。

時を同じくして、同日経新聞の3月8日付の「経済教室」欄で、財政学の神野直彦東大教授が「欧州の都市再生に学ぶ」を執筆して、次のように言っている。

「都市再生には2つの道があり、一つはアメリカや日本のように、経済成長の持続可能性を目指す、市場主義に基づく都市再生である。もう一つはヨーロッパ型の、人間の生活の「場」としての持続可能性を目指す、市場主義に基づかない都市再生である。そしてヨーロッパでは、自然環境と地域文化の再生が都市再生の両輪となっており、経済活性化にも結びついている。ただしそれには市民が財政上の自己決定権を確保することが条件である。」

現在、日本では大都市を中心とした市場主義に基づく都市再生の動きが具体化しつつある。神野氏の言うように、制度的条件もあり、ヨーロッパ型の都市再生を直ちに導入できるとは思わないが、都市づくりは将来の都市資産の形成であり、決して負の資産だけは残さないこと、また都市再生は大都市に限らず、地方都市にとっても重要な課題であることなど、心して取り組むべきことが多々あると思う。

(代表取締役 堀田 紘之)

---

---

### ●アフガニスタン・カブールの緊急復興

---

---

9.11テロ事件以来初の日本政府経済協力ミッションの一員として、3月上旬にアフガニスタンの首都カブールを訪れた。長年の内乱と紛争のために確かに廃墟のような都市であったが、その街中は車が多く人の往来も盛んだ。短期間の訪問ではあったが、外国人用の宿泊施設が整っていないこともあり、テレビはおろか電気や水に事欠く不便さで、不衛生な市民生活を一部経験することが出来た。現場の都市施設・インフラのどこを見ようと、どの役所を訪れても緊急復興プロジェクトのタネがころがっている有様である。

アフガニスタンは今、日本人の国際協力への理解を変えつつあるらしい。昨年末の内閣府による世論調査では、アフガニスタンの人々の苦痛に満ちた生活への共感からか、国民の3/4がODAを支持した。また日本社会の中で神戸震災以降、NGOへの認知と信頼が高まっており、日本政府もアフガン復興はNGO抜きでは考えられないとコメントしている。我々のミッションの目的は、緊急復興を妨げる深刻な問題を効果的に解決できるプロジェクトを日本勢により実施するチャンネルづくりであった。ミッションの活動はそのため他の先進国援助機関との協調関係を意識しつつ、暫定政権要人、他国協力機関及び現地で従事しているNGOとの意見交換を行った。

国連のブリーフィングでは、カブールだけで今年100万人規模の難民とIDP(Internally Displaced People)の帰還が見込まれるということである。砂塵を立てながら市内に入る帰還民のバスとトラックの一団を眺めながら、復興はまさに時間との勝負であることを実感した。

(海外室 熊沢 憲)

---

---

### ●PIARC C10会議に出席して ～国際会議を日本で開催するとしたら～

---

---

去る1月末にPIARC C10(世界道路協会 都市内総合交通委員会)に出席した。ここでは4年毎に世界道路会議が開催され、その会議に向けて年2～3回の委員会が開かれる。C10では2003年にダーバンで本会議が開かれるため、2000年からパリ、ロッテルダム、マラケシュ、コペンハーゲン、そして今回のベルンと、世界各地で委員会が開催され、日本からは早大浅野光行教授と東大原田昇教授が委員として出席し、私はマラケシュ会議から参加している。国際会議とはいえ、年2～3回の委員会は途上国にとっては出費が痛いので自然と先進国が集まる形となり、レギュラーメンバーへの配慮から開催地がヨーロッパになってしまうのである。会議は全て英語で行われ、前日晩には地元当局の晩餐会、初日には朝から4つのグループに分かれて討議、2日目には全体発表と先進地視察で幕を閉じる、というのが通例の日程であ

る。その間の昼食やディナーも開催地スタッフが趣向を凝らしている。会議ではあるが、参加者には気持ちよく滞在してもらいたいという地元の熱意だ。同伴者向けにはオプションツアーも計画されている。

ことPIARCについては、もし国内で開催するとしたらどこが良いだろうかと、ふと考えてみた。気持ちよく滞在でき、ホテルと会議場が近い(或いは同一)であること、ツアーが組め、かつ先進視察地を有し、何よりも地元スタッフ(行政)が熱意を持ってホストにあたれるところである必要がある。できれば空港から近いところが望ましい。

国内では本年1月末に、PIARCの国際冬期道路会議が札幌で開催されている。ホームページで見ると限り実用に用意周到に行われたようだ。国土交通省大臣、北海道知事、札幌市長の挨拶から、地元の案内(イベントや料理を含む)やツアーに至るまで、見ていてスタッフの緊張が伝わってくるようだ。海外での開催と違うのは、日本語が公式言語に加わっていて、外国人向けには同時通訳のヘッドセットが配られる点が挙げられる。ただし、夕食会には同時通訳は付かないだろうから、スタッフにも英語力が要求されるであろう。もし、世界道路会議を公募すると、国内はどこの自治体が手を挙げるのであろうか。

(都市計画部 黒坂 剛)

=====

●青年海外協力隊レポートvol.9～モロッコ都市学の初め

=====

モロッコの都市はよく迷宮都市と言われる。これは、京都(平安京)とほぼ同じ頃に始まった古都フェズを初めとした「メディナ」と呼ばれる旧市街地の複雑さに端を発する。初めは水の近くにレンガ造りの四角い平屋建ての家が集まり細い路地を形成していたものが、家族が増えたりお金が貯まったりするたびに増築を繰り返した結果、自分の家の2階が隣の家の2階部分まで占有していたり、路地を跨いで2階の部屋があったり、と奇妙な建築空間を生み出したものと思われる。メディナは首都や古都以外でも主要な地方都市には必ずあるもので、それぞれ違った規模や雰囲気を持っており、壁が白と青できれいに塗り分けられたかわいらしい街や、起伏に富み坂や階段の多い街、土色の壁の埃っぽい街など様々である。また、メディナの外側には、フランスの統治下に建設された新市街地が広がり、公園や道路、住宅街などが形成されている。この新市街地とメディナを併せて一つの市としているのが、現在のモロッコの都市である。

一方、地方の農村部では斜面に集落を形成している。遠くから見ると、壁の色が岩山や土の色と同化しているため斜面にへばりついているようにも見える。これは、この地の先住民族がもともと斜面に掘った横穴で生活していたせい、水利の便のためなのか、はっきりとはわからないが、大自然の力の大きさの中で何百年もじっと耐えて暮らしてきた時間の重みを感じられる。

新市街地では住宅の建設が盛んに行われ都市化が進む一方、農村部では時間が止まっているようにさえ見える。そんな発展途上国によく見られる都市と農村の格差が、この国にも存在している。

(第三計画室 酒井 夕子)

アルメックホットニュース(平成14年3月15日発行)

////////////////////////////////////